偽八五郎

野村胡堂

一

「八、お前ちかごろ悪い料簡を起しゃしないか。三輪の万七親分が変なことを言っていたようだが――」

八五郎の顔を見ると、銭形平次はニヤリニヤリと笑いながら、こんな人の悪いことを言うのです。

「それですよ、親分。あっしはそんな悪い人間に見えますか」

八五郎は少しばかり肩肘を張ります。

「甘い人間だとは思っているが、悪い人間とは気が付かなかったよ。尤もそう果し眼になると、思いのほかお前の顔にも凄味がでるから不思議さ」

「親分、あっしが、子さらいや強請をするかしないか考えて見て下さい。あらゆる悪事の中でも、人の子をさらって金を奪るほど罪の深いことはないと、親分が始終言うのを身に沁みて聴いておりますよ」

八五郎は腹を立てながらも、よくよく困惑している様子です。

「だから詳しく話して見るが宜い。三輪の万七親分の言うのが本当か、本人の八五郎が言うのが本当か、一伍仔什を聴いた上で極めようじゃないか」

平次はまだからかい顔ですが、この事件にはかなりの興味と熱意を持っている様子でした。

八五郎の掛り合いになった子さらい事件というのは、江戸の下町に、この夏から起った誘拐で、数はさして多くはありませんが、

仕事がいかにも巧妙(こうみょう)で惨忍で、江戸っ子たちの義憤の血を沸き立たせるには充分なものがありました。

さらわれるのは、良家の綺麗な女の子で、六つ七つから十歳止りくらい、四五日から長くて十日くらい留めおいて、たいていは親許の身分に応じた金を奪って戻しますが、中に、五人に一人、三人に一人、一と月二た月と経っても還(かえ)してくれないのも幾人かはあるのでした。

戻った娘から聴くと、誘拐(ゆうかい)するのは念入りに化粧をした、髪の毛の多い優しくて綺麗な『姉さん』で、子供の観察で年の頃はよくわかりませんが、二十五は越していない様子です。小娘を釣る手段は、さいしょは夕方の空地などで多勢の子供が遊んで居るところへ行って、びっくりするほど飴や菓子をバラ撒(ま)き、そのうちの子柄の良いのを選って、簪(かんざし)とか毬(まり)とかをやってつれ出し、あるときは空家の中へ、あるときは船へ誘(さそ)い込んで、何処ともなくつれて行くのです。

「子供は何んでも田舎の一軒家のようなところへ連れ込まれ、ろくに食物もやらずに、何日かは投り出して置かれるそうです。尤(もっと)も番人のような年寄夫婦がいて見張っているが、ときどき若い男が来て、子供を裸にして、妙なことをさせるんだそうで――」

「妙なこと？」

「妙なことに違いありません。女の子の骨組や身体を念入りに見たり、高いところから突き落したり、梁(はり)へブラ下げたりするんだと言いますから、正気の沙汰じゃありませんね」

「それから？」

八五郎の話は予想以上に奇っ怪です。

「それから子供の親許へ手紙をやって、何時の幾日に、どこそこへ金を持って来い、子供は引換えに返してやる。子供を無事に返して貰いたかったら、一言も人に漏らすな、お上の役人の耳に入れるような事があったら、子供は生きちゃ帰らないと思え――と斯うだ。金額は相手によっていろいろだが、少ないので十両くらいから、多いので五十両止り」

「その金を受取りに行くのが、八五郎――お前だというじゃないか」

「だから親分、あっしは癪にさわって、癪にさわって――」

「子供をつれて来て、金を引換えに奪って行く男が、少し柄は小さいが、三十前後の面長な良い男で――ウフ、その辺は八五郎にそっくりだな――おれは銭形平次の子分で、神田の八五郎というものだ、口惜しかったら何処へでも訴えて出ろ。その代り子供はもういちど姿を消すぞッと言いながら、懐中の十手を、突っ張らかして見せるんだってね」

平次は少しからかい気味です。

「それですよ、親分。子さらい野郎に何んの因縁があるか知らないが、なにもあっしの名なんか騙らなくたって宜いじゃありませんか」

「怒るなよ八、本当にお前が曲者なら、まさか名乗って行くような間抜けなことはしないだろう。三輪の親分が何んと言おうと、笹野の旦那は笑って聴き流していらっしゃるよ」

これが平次の本音だったのです。

「本当ですか、親分」

「口惜しいと思うなら手一杯に働いて見るが宜い。偽物を縛った

上真物の八五郎を並べて、男っ振りの鑑定をするのも洒落ているぜ」

「やりますとも、畜生ッ」

八五郎はすっかり夢中になっております。曲者に名を騙られた口惜しさより、親分の平次にこう言われた信頼の言葉が嬉しかったのでしょう。

二

「ところで、俺のところへ、こんな手紙を投り込んだ奴があるんだ」

平次はそう言いながら、煙草入の中から小さく畳んだ紙片を出してひろげました。

「へエ、これなら、あっしにも読めそうですね——子さらいの曲者を知りたかったら、両国へお出で——とね、歌の文句見たいだ」

八五郎は顎で拍子を取りながら、恐ろしく下手な仮名文字を読みだします。

「両国だけじゃわからないが、それでも江戸中を盲探りに捜し廻るよりは楽だろう。——両国へ行ったら、軽業、足芸、玉乗りの小娘に気をつけて見るが宜い。——それからもう一つ、さらった子供は船で運んだかも知れない。そんなことも気をつけるんだ。宜いか」

「へエ」

八五郎は何が何やらわからないながら、ともかくも飛出しました。自分の名を騙って、悪事の中でも一番タチの悪い子さらいを

やって歩く野郎を見付けて、存分に溜飲を下げようと言った、八五郎らしい激怒に燃えているのでした。

それからざっと一刻ばかり。

「サア、大変ッ、親分。大変なことになりましたよ」

初秋の路地一パイに張り上げながら、八五郎はキナ臭くなって飛込んで来ました。

「何んだ、相変らず大変な憑物(つきもの)がしたようじゃないか」

「驚いちゃいけませんよ。両国の人気者、足芸のお紋(もん)の小屋の軽業師で、磯五郎という男が、柳橋の下に舫(もや)った船の中で、船頭の金助といっしょに殺されて居るとしたら、どんなもので？」

「それが何うした」

「何うも斯うもありません。後のことは土地の下っ引に任せて、何はともあれ親分のところへ御注進と来ましたよ——あ、喉が乾く、姐さん、済みませんが水を一杯」

万事がこの調子の八五郎です。

「それは面白くなったぞ。八、すぐ引返せ」

二人は両国へまっしぐらに飛びました。

柳橋まで行くと、橋の上から土手を埋めて、一パイの人だかり。

「あ、銭形の親分」

見張っていた二三人の下っ引は、道を開いて通してくれます。

初秋の真昼の陽が、惜しみなく降り注ぐ川の上、花火も涼みも済んで、水の上は至って閑散ですが、物見高い江戸っ子が人垣を造って、のんびりと口を開いて眺めている中を、平次は屋形船の中に入って行きました。

「あッ」

中は予想の如く血の海、折り重って倒れた磯五郎と金助は、銘々に得物を持って、いちおう相討のような形になっているのでした。

「相討ですね、親分」

八五郎の鼻はうごめきます。

「匕首(あいくち)と脇差か」

平次は腑(ふ)に落ちない顔をするのです。

「御検屍のお係り中戸川要之助様は、相討ということになさいましたが――」

番をして居た下っ引の一人は言うのでした。

「脇差を持っている磯五郎が、二三ヵ所突かれた上袈裟掛(うえけさがけ)に斬られて死んでいるし、匕首を持っている金助が、後ろから匕首か何んか細い刃物で一と突きにやられて居るのを、変だとは思わないか」

「へエ――」

八五郎は鼻の下を長くしました。

「その上磯五郎は脇差を左の手に持っているぜ。この男はひどい左利きでなきゃ、死んでから持たせた脇差にきまって居るよ」

平次の明察は隅から隅まで行き届きます。

「すると？」

八五郎は一とかど尤もらしい顔をして見せます。

「曲者はほかに居るのだよ、――見るが宜い。磯五郎の傷は三ヵ所だが、金助は一と突きだ。多分、曲者と金助と二人でまず磯五郎を殺し、油断をしたところで金助を後ろから一と突きに殺したんだろう。柳橋の下に舫(もや)った船の中の騒ぎじゃ誰も気が付かない

のも無理はないよ」

平次の説明には非の打ちようもありません。

三

磯五郎の小屋というのは、そこからあまり遠くないところで、大きい小屋と小屋との間に挟まった、三間間口のささやかな軽業小屋でした。

「入らっしゃい」

木戸に坐っている塩辛声(しおからごえ)は、四十前後の不景気な男で、その頭の上に掛け並べた泥絵(どろえ)の具(ぐ)の看板は、存分に下品で、そして存分に刺激的でした。

「磯五郎が死んでも、小屋は休まないのか」

平次は木戸に立ち止りました、

「休んじゃ、こちとらの顎(あご)が乾上がります。ヘエ」

相手の懐中の十手を意識すると、中年者の木戸番の調子は急に丁寧になります。

中へ入ると、ちょうど一座の花形、お紋という美しいのが、足芸の真最中。その芸は大したものではありませんが、きりょうは抜群で、擬(まが)い金襴(きんらん)の肩衣(かたぎぬ)に、白絹の手甲、美しい脛(はぎ)をチラチラと見せながら、両足を使って字も書けば揚弓も射、樽(たる)も廻せば傘も使います。

客の入りはほんの数えるくらい、柳橋の下の騒ぎに持って行かれたせいもあるでしょうが、時刻の早いのと、一座の貧しさも原因するでしょう。その客もたいていは生若い男や、自堕落(じだらく)な遊び

人などで、お紋のきりょうに釣られて、口を開いて小半日見ていると言った人間ばかりです。

お紋の美しいのに絡(から)んで、型の如き道化が一人。これは北六と言って四十五六の水ぶくれの不景気な男、手品も軽業も一向いけず、舞台の上をヨチヨチと歩いて、少しばかり可笑しい——が半間な道化を言っているのがあります。

ほかには和吉という口上言いが一人、これは三十前後のちょいと好い男ですが、色白の額から左の頬へかけて、大焼痕(おおやけど)が凄まじく、引っ釣に膏薬(こうやく)などを貼った、見る影もない人相です。最も声もよく、甲高い調子の口上も、なかなか手に入ったもので、この小屋の一つの人気になっております。

和吉がいない時は、殺された磯五郎が代って口上も言いましたが、この磯五郎というのは、一番の芸達者で、お紋の小屋を背負って立って居たのですから、磯五郎が死んでは、この小屋の行末も思いやられます。

囃子(はやし)方は三人、お石という四十がらみの大女が中心で、あとは子供ばかり。この貧しい軽業小屋が、江戸一番の盛り場で、ともかくもやって行けたのは、お紋のきりょうと、磯五郎の芸のお蔭でしょう。

お紋が楽屋へ入ったのを見極めて、平次と八五郎は大急ぎでその後を追いました。表の方は一としきり囃子(はやし)が勢い付いて、両国中を引っ掻き廻すような騒音を立てております。

「親分さん方、入らっしゃいまし」

お紋は派手な肩衣を外しながら、平次と八五郎を迎えてにっこりしました。近まさりするきりょうですが、舞台で遠くから見る

のと違って、さすがに老けております。どうかしたら三十を越しているのかもわかりませんが、取なしが派手で、表情が大きいので、ひどく仇っぽく見えます。

「磯五郎が殺されて困ることだろうな」

平次の問いは平凡でした。

「え、急のことで、どうして宜いかわかりません。私は女でいざとなると役に立たないし、和吉さんは智恵者ですが、芸は一つも出来ず、――先の事を考えると真っ暗な心持になってしまいますよ」

お紋は斯う言った調子でした。銭形の平次も眼中にないと言った、不敵さと言うよりは、明けっ放しで正直一途で、物事に掛引のない証拠とも見られます。

「お前は一日中舞台へ出ているのか」

「え、江戸中の皆様が御存じで、昼の午刻(ここのつ)から、夕方の酉刻(むつ)過ぎを、お客様の前に身体をさらしていない日はありません。――去年の暮に風邪を引いたときと、半歳ばかり前の御停止(ちょうじ)で二三日休んだ時のほかは、何んの因果か、休む暇もない有様で――」

お紋は淋しく笑うのです。しばらく舞台は道化の北六が繋(つな)いでいる様子、小人数ながらドッと笑う声が、ここまで聞えます。

「宿は何処だ」

「松永町に、お囃子のお石さんと二人住んでいますよ」

「配偶(つれあい)は？」

「ホ、ホ、私のような者に」

お紋はまた淋しく笑うのです。

「朝と晩は何をしているんだ」

「まさか内職をして居るわけじゃございませんが、女ですから、針も持ち、お勝手にも立ちます」
「磯五郎の身持はどうだ」
「道楽強い方で、ずいぶん諸方に迷惑をかけたようでございます」
「女房はないのか」
「え、独り者で、この裏の荒物屋の二階に、北六さんと一緒に暮しておりました」
お紋はそう言いながら、欝陶しそうに島田髷の鬘を取るのでした。軽そうな鬘下で、キリリとした顔の道具が却って引立ち、肩衣を脱いだ胸のあたりの、ほのかな乳房のふくらみと不思議に魅力的な対照を見せております。
声は芸人らしく少し皺枯れたアルトですが、この女には何にか言いようのない、特異なものがあります。これが美しい子さらいの活躍する、夕方に小屋をあけて、四つ目や、中の郷や、浜町や、筋違いまで遠出をする機会があったら、平次は躊躇もなく縛る気になったかも知れません。
「この手紙の筆跡を知っているか」
平次が煙草入から出したのは、例の八五郎が歌の文句のようだと言った、――子さらいの曲者を知り度かったら両国へお出で――と書いた手紙でした。
「あ、磯五郎の筆跡ですよ、親分」
お紋には何んの躊躇も技巧もありません。
「間違いはないな」
「こんな下手な字ですもの、真似ようたって真似られやしません」
「手きびしいな」

平次もツイ苦笑いしました。

四

「お前は？」

楽屋の入口に居る青白い男、平次はそれを眼で呼びました。

「へエ、口上言いの和吉と申しますが」

腰の低い男です。挙げた顔を見ると左半分の大焼痕（おおやけど）で、右半面の好い男が、恐ろしくグロテスクに見えます。

「この一座には古いのか」

「一年ほどになります」

「もとは何処にいた」

「旅廻りの芝居に居りました。中村和吉と申しまして、へエ、その頃はまだ焼痕もございませんでしたので、へエ、——田舎芝居小屋で怪我をしました。へエ」

「磯五郎の殺されたことに就（つい）て、思い当ることはないか」

「私には何んにもございません、——私と違って磯五郎は気の勝った男でしたから、いろいろ敵も作ったことと存じます。へエ」

腰が低くて要領が良いというだけで、それ以上何んにもわかりません。

「お前の家は何処だ」

「この裏で——磯五郎さんや北六さんの住んでいる荒物屋の隣の駄菓子屋の二階におります。へエ」

問答はそれっきりでした。やがて出の合図があると、お紋と和吉は舞台へ——、それと代って道化の北六が楽屋へ来ましたが、

これは少し智恵が足りないらしく、何を訊いても要領を得ません。二十貫近い肥っちょで、少しヨチヨチしている様子を見ると、子さらいにも磯五郎殺しにも関係があろうとは思われなかったのです。

囃子(はやし)方のお石と木戸番の竹松にも逢って見ましたが、二人ともお紋同様昼から宵まで小屋を動かないと判っているので、子さらいとは関係がなく、

「磯五郎さんは強気でちょいと男もよかったから、ずいぶん敵も作りましたよ。――お紋さんと仲がよくないかって？　御冗談で、お紋さんは確(しっか)り者ですよ。磯五郎さんの方でチョイチョイ絡(から)んだようですが、あの人は芸人なんか、相手にしやしません。和吉さんですか――あれは利口者ですよ。役者も田舎廻りでは良い顔だったといいますが、あの焼痕(やけど)じゃ、舞台の色事師もだらしがありません。気の毒ですね」

お石はこんな事を言うのです。

竹松は木戸で塩辛声を振り絞るほかには何んの思案も智恵もない方。一と通り一座の者に逢うと、船頭の金助の身許を洗わせましたが、これは近所の船宿にゴロゴロしていた船頭ですが、身持が悪くて三月ばかり前に追出されたとわかりました。

「八、来ないか。裏の荒物屋と駄菓子屋へ行って見るが」

平次はその辺を切上げて、お紋の小屋の裏へ行きました。

磯五郎と北六の居る荒物屋というのは、老夫婦の内職のような小さい店で、その二階に住んで居る磯五郎と北六は、よくもこれで人間が暮らせると思うような徹底(てってい)した簡易生活です。

「磯五郎さんは――死んだ者の悪口をいうんじゃありませんが、

そりゃ喰えない男でしたよ。それに比べると北六さんは仏様で」

荒物屋の亭主の話はこれ以上には出ません。

「昨夜(ゆうべ)は？」

「出たようです、それっきり戻りません。今朝になって、――磯五郎は何うした、小屋へ来ないが――と、和吉さんが迎いに来て、二階に上って見たようですが、それから間もなく、柳橋の下に舫(もや)った船の中で、死骸になっているのを見付けた者があります、――大騒ぎでございました」

「和吉が来たのは何刻ごろだ」

「巳刻(よつ)（十時）時分で――いつもそんなに早く小屋へは参りませんが、今日は新しい仕掛物の稽古(けいこ)があるんだと和吉さんが問わず語りに言っておりました」

荒物屋の老爺の話をそれくらいにして、平次は磯五郎の荷物を出させました。小さい竹行李(たけごうり)がたった一つ。蓋(ふた)を開けて見ると、中は薄汚れた袷や小物で、恐ろしく貧乏臭いものばかりですが、不思議にドッシリした重さがあるので行李を引っくり返して見ると、底に隠して置いたらしい、欝金(うこん)木綿の財布がゾロリと落ちて来ました。紐(ひも)を解いて器の上にあけると、ザラザラと落ちたのは、吹き立ての小判が何んと三十枚、四方の調度や持物の貧しさに比べて、これは恐ろしい不調和な大金です。

「親分、――その欝金(うこん)木綿の財布には、四つ目の砂田屋と丸判が捺(お)してありますね。三日前の晩、回向院前で砂田屋の主人が、さらわれた娘と引換えに、あっしの名を騙(かた)った曲者に渡した財布ですよ。金額もちょうど三十両」

八五郎はすっかり夢中になります。

「待て待て八、財布が出たからと言って、磯五郎が曲者とは限るまい」

平次は町役人を呼んで財布を預け、荒物屋を見張るように頼んで、隣の駄菓子屋に行きました。ここは六七人の大家族で、二階を一と間和吉に貸しておりますが、

「和吉さんは穏(おだや)かな良い人ですよ。――そりゃ、あの若さですもの、家にばかり居るわけじゃございません。ときどきは夜遊びにも出かけますが――え、え、昨夜も宵から出かけて仲町を一と廻りして来たと言って、夜半前には帰りました。和吉さんはあまり金は持って居ないようですが、身仕舞の良い方で、私どもに部屋代の迷惑はかけません。いつも――仲町へ行っても一とわたり張店を眺めて大引(おおびけ)前に帰るのがこちとらの贅沢さ、お大尽の真似をする気もないが、たまには広い梯子段を威勢よく上がって見たくなるよ――と、そんな事を言って居ります。でもときどきは泊って来ることもありますが――」

駄菓子屋の親父の話を聴きながら、一とわたり和吉の荷物に目を通しましたが、小綺麗に整っているというだけで、金目のものは一つもありません。

そこから松永町のお紋とお石の巣へ。

二人の女が一軒借りて小女を使って住んで居りますが、小女は新米で何んにも知らず、近所付合もあまりないらしく、二人の職業さえ知らない有様で、何も聴き出しようもありません。

「お紋さんはお石さんと一緒に、暗くなってから戻ります。――夜は時々和吉さんという方が来るだけで、エエ外へ出ることもないようです。尤(もっと)も私は早く休まして貰いますが」

というのが、小女の知っている全部でした。家の中は女世帯らしく小綺麗で、大した贅沢ではありませんが、住みよげに出来ております。現金の蓄(たくわ)えは殆(ほと)んどなく、ときどき庭から出入りするらしく、ひどくその辺を踏み固めているのが眼につきます。

五

この事件の解決は、至極簡単に見えて、思いのほかに困難でした。子さらい事件と磯五郎と、お紋の小屋の間には、一脈の関係があることは明かですが、磯五郎が殺されてしまっては、手の下しようもなかったのです。

一番怪しいお紋は、夕刻は小屋を離れることなどは思いも寄らず、偽八五郎ではないかと思う和吉は、手拭の頬冠りくらいでは、隠せそうもない大焼痕(おおやけど)で、誰に鑑定さしても人違いです。

あとは水ぶくれの北六、頭の悪そうな竹松、錆(さび)の上がった中婆さんのお石では、どうにも子さらいの役者になりません。

それでも平次は念のために、さらわれて帰った子――四つ目の砂田屋の娘お春、中の郷の木津屋の娘お清、浜町の清川の妹娘お砂などをつれて、両国のお紋の小屋の軽業を見物させましたが、三人が三人とも、自分達を誘拐(ゆうかい)したのはお紋ではないと言いきるのです。

偽八五郎に金を渡した親たちも小娘に伴れられて来て、一々首実験をさせましたが、和吉も竹松も北六も偽八五郎ではなく、なお念のために見せた、船頭の金助と、磯五郎の死顔にも、全く見覚えがないというのでした。

偽八五郎は頬冠りはして居りましたが、強いて顔を隠そうともせず、言葉少なではあったが、啖呵の切れる、良い男であったというのです。

ここまで来ると事件はハタと行詰ってしまいます。

「何んか手掛りはないものでしょうか、親分」

八五郎の口惜しがるまいことか。

「ないよ。――相手は容易ならぬ曲者だ、――がこれだけの事は判る。綺麗な女の子をさらったのは、親を強請って金にするほかに、身体の良いのは、軽業娘に仕立てて、田舎向の香具師に売るつもりだろう。高いところから突き落したり、梁へブラさげたり、骨組を見たりするのは、そのためだ。軽業に向かないのは、親許に帰す代り、うんと金を強請った」

平次は静かに言います。

「太てえじゃありませんか。そんな虐たらしい事をする奴は、どんな事をしても縛らなきゃ」

八五郎はすっかり腹を立ててしまいました。

「縛る術はたった一つある」

「どうするんです。親分」

「お前はお紋の小屋へ毎日行って、どんな細かい事でも見逃さずに、俺のところへ知らせることだ」

「へエ？」

「ことに、お紋と和吉の顔に気をつけろ。二人の顔の皺一筋、ほくろ一つ見極めるのだ」

「そりゃ何んの禁呪です。親分」

「追々わかるよ。――それから、和吉は本当に仲町へ行くかどう

か、夜出たら、そっと後をつけて見ろ。――もう一つ、――あの小屋に目立って金費いの荒い奴はないか」

平次の話を半分に聴いて、ガラッ八の八五郎はとび出しました。

それから五日目。

「親分、――何んにも変ったことがないので、すっかり御無沙汰しましたよ」

ぼんやり帰って来た八五郎は、全く精も根も尽きた姿です。

「何にかあるだろう」

平次はそれでも何にか期待している様子です。

「黙って舞台を見ているのも、ずいぶん骨の折れる仕事ですね、――夜は和吉の宿の前で、毎晩頑張りましたが、四日も夜明しをさせて、どこへも出ないのは皮肉じゃありませんか」

「五日目の晩は？」

「とうとう出かけましたよ、昨夜遅くなってからフラフラと出かけた和吉が何処へ行ったと思います。――仲町じゃありませんよ」

「松永町だろう」

「あ、どうしてそれを」

「そして、お紋のところへ泊って、今朝ぼんやり帰って行ったろう」

「その通りですよ。あの二人は唯（ただ）の仲じゃありませんね。――そう判ると何んの変哲もないが」

「いや、俺はそれが知りたかったのだ。――他に気の付いた事はないか」

平次は問いを進めました。

「金使いの荒い奴なんかありゃしません。よくよく皆んなケチな

奴ばかりで」
「顔は？」
「毎日毎日お紋と和吉の顔ばかり眺めて居ましたがね。――お紋の阿魔はあっしが気があると思った様子で、ウ、フ」
「馬鹿、そんな事を訊いてはしない」
「ヘエ、――それから、変ですよ。和吉の顔の赤い焼痕の色が日によって濃くなったり薄くなったり、少し大きくなったり、小さくなったりするじゃありませんか」
「本当か、それは」
「間違いはありません」
「よし、俺はそれをお前の眼で見て貰いたかったのだ。来い、八」
「何処へ行くんで？」
「子さらいの曲者と磯五郎と金助を殺した下手人を一ぺんに挙げさしてやるよ」
「有難てえ」
二人は飛んで行きました。両国のお紋の小屋へ――。

× ×

平次と八五郎が乗込んだのはお紋の小屋。下っ引二三人を狩り出して、大骨折で縛ったのは、何んと大焼痕の和吉、と美しい女太夫のお紋だったのです。
和吉の顔を濡れ手拭で拭くと、焼痕は綺麗に消えて、何んの傷もない良い男になります。これが旅役者の凶状持で、何んとかの和三郎と言った大悪党と判ったのは後のことです。
二人を送った帰り。
「サア判らねえ、お紋はどうして小屋を抜け出して子供をさらっ

たんです。――和吉があっしに化けて金を強請(ゆす)ったのはわかるが」

八五郎は相変らず絵解きをせがみました。

「それが大間違いだよ。綺麗な新造に化けて子供をさらったのは、お紋ではなくて和吉だったのさ――あれはなかなか腕の良い女形(おやま)だ。さらわれた子供たちも――念入りに化粧した、髪の毛の多い綺麗な姉さん――と言ったろう。厚化粧で女形に化け、お紋が舞台で使う鬘を借りて冠ったのだよ。顔の焼痕は書いたり消したり自由自在だ。着物はお紋のを借りたのさ」

平次は面白そうに説明するのです。

「あっしに化けて金を取ったのは？」

「それがあのお紋だ」

「へエ？」

「あの女は太い声をしているだろう。鬘下(かつらした)に頬冠りをして、男姿になると夜眼ではちょっと女とわからないよ。――さらわれた子供たちにお紋の首実験をさせ、親達に和吉や磯五郎を鑑定させたのは大笑いさ。二人ともそれを考えて、女が男に化け男が女になったのだ。――尤も和吉の顔の焼痕は、凶状持の身分を隠すためだったが――」

「それに二人は夫婦だったんですね」

「その通りだよ。お紋と和吉が夫婦だとわかると、いろいろのことがはっきりするじゃないか」

「磯五郎は？」

「和吉とお紋の悪事を嗅ぎつけて強請(ゆす)ったのさ。磯五郎が俺のところへ手紙を出したと気が付いて急に仲間の船頭の金助を語らって殺したが、金助の口から、ばれそうに思えたので、それを

封ずるつもりで油断を見すまして金助も殺したのだろう。あの和吉という奴は、優しそうに見えるが恐ろしい悪党だ」

「へエ」

「その上和吉は翌る日の朝、稽古があると言って磯五郎の宿へ行き、少し足らない北六の眼を誤魔化して、三十両の財布を磯五郎の行李に投り込み、磯五郎に子さらいの罪を被せようとしたのだ」

「悪い奴ですね」

「磯五郎はあんなに金に困っているから、三日前に手に入れた三十両を費わずにいる筈はないと思ったのがそもそも疑いの緒口だったよ。和吉とお紋は贅沢に暮しているくせに、金を持って居ないのもおかしいと思ったし、和吉の焼痕が、どうも描いたものらしいと思ったから、お前に見張らせたのさ。——お紋とお石は同腹だろうが、小女は何んにも知るまい。お紋は夜中に偽八五郎に化けて、庭から脱出していた様子だ」

「——」

「だが、あれほどの悪党でも情愛は別だな。お紋と和吉は矢張り五日と逢わずには居られなかったのだ」

「でもお紋は良いきりょうでしたね」

「あのきりょうでも、子さらいをするようじゃ鬼だ。お前の名を騙ったのは気紛れだろう。変な気を起すなよ。八」

「へッ、冗談でしょう」

八五郎は極り悪そうにツルリと長んがい顔を撫でました。

（編注）

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩　柚月

初出―「オール讀物」昭和二十二年九月号　文藝春秋新社

底本―「銭形平次捕物全集」第八巻　河出書房　昭和三十一年八月十五日初版

編集・発行　銭形倶楽部